

⑮好ゲーム目白推し（大学選手権ベスト8）

2020年12月28日

トーナメントのベスト8、4試合はどんな大会でも面白い試合ばかりで何となく見ていてお得感のある感じがする。コロナ禍での2020年度大学選手権が始まりあっという間に準々決勝が終わった。すべての試合をビデオで観るのに概ね1週間を費やしてしまった。どのチームも今年の意気込みを試合にぶつけていた。コロナ禍で夏までほとんどスポーツ観戦ができなかったからかもしれないが、観ていて清々しいプレーの数々、満足な気分を味わえた。

対戦カードは、明治大（対抗戦1位）-日大（関東リーグ戦3位）、流経大（関東リーグ戦2位）-天理大（関西リーグ戦1位）、東海大（関東リーグ戦1位）-帝京大（対抗戦4位）、慶應義塾大（対抗戦3位）-早稲田大（対抗戦2位）という組み合わせ。

試合内容として、一番興味があるのが関東リーグ戦1位と対抗戦4位の戦い、どちらが強いのかリーグ戦と対抗戦の意地がぶつかる東海大-帝京大戦が個人的には興味があった。どちらもFWに強みがあるチームで特徴が似ている。試合展開はゆっくりがつつといった感じで、ミスの少なかった帝京がロスコアながら辛勝。正月一番乗りを決めた。BK陣は両チームとも関西有名校のスターが名を連ねるチームでもあり、花園（東大阪市）の観客にとっては、久しぶりに満足のゆく試合であっただろう。

同じ花園の第二試合は天理大-流経大の関西-関東の戦い。共にサモア、フィジー、トンガといった留学生を多数揃えているチームでもあり、こちらもプレースタイルが似ている。結果は、天理大の圧勝。大学選手権奪取を見据えた徹底した試合内容で、流経大が圧倒された試合であった。関西リーグは今シーズンの試合開始が遅れたこともあり、試合数の少ない中、天理大のチームとしての仕上がりは完璧だった。先週の茨城ダービーを引き分け、抽選で上がってきた流経大も疲れの見える週で少々気の毒でもあった。

11月に定期戦の早慶戦の再戦。こちらはやはり明治大に敗れた早稲田の意地と意欲的なプレーが勝った試合。先週京産大と試合をしている慶應大に対して、一週空いた早大は余裕さえ感じられた。慶應大の強みであるFW戦をことごとくつぶし、ラインアウトも慶應の意のままにさせなかった。早大の大学選手権を狙う意地が感じられた。また、昨年度高校優勝の桐蔭学園の伊藤大祐君が早大入学後初選抜。非凡なプレーでトライを奪った。まさに「持っている感」を醸し出していた。前半で慶應大タックラー三木君が怪我で戦線離脱が痛かった。

最後に明治大-日大、われらがハリケーンズの試合だが、明治大の胸を借りる試合となった。しかし、明治大学のゆっくりとした立ち上がりは勇者の誉れ高く、巧みに陣地を確保。そして動き始めたら止まらない暴走トラックのようにも見えた。とにかくアタックもさることながら、ディフェンスもさらに磨きがかかっている。後半の日大のラインアウトからのモールでのトライは圧巻。また終了間際の反撃は、主将藤村君を中心とした「藤村組」の最後の年を髣髴とさせるものであった。

いずれの試合もラグビーの醍醐味を感じさせる「大学ラグビー」ならではの選手権の試合ばかり。これで年内の大学の試合は終了で、1月2日の対戦は、明治大-天理大、帝京大-早稲田大のいずれも好カードとなった。高校ラグビーも始まり、ラグビーファンにとってはたまらない正月が来る。どの試合も見逃せない試合だ。